

事務局使用

M様らしく最期まで

～あきらめたらあかん！！～

あきらめない

その人らしく

葛藤

徳島県・藍住町

ふりがな ぐるーぷほーむ おやのいえ
種別・施設名 グループホーム 親の家

ふりがな かいごふくしし おおかわまみこ
職種・発表者名 介護福祉士 大川真美子

共同研究者名 福富郁代

共同研究者名 西川優

【親の家基本方針】

入居者は介護を受ける人ではなく生活の主役である入居者の心の動きに共感しありのままを受け止める

(はじめに)
馴染みのある『親の家』で最期を迎えることになったM様。「〇〇したい」と言うM様の気持ち、「チューブに繋がれた母は見たくありません。」というご家族の思いを受け入れ、入院治療を受けるのではなく、残された時間少しでも普段の生活を継続することになった。M様の状態が急激に変化していく中、医療の限界を知ることになり、M様・家族・スタッフはこれで正しいのか？この選択は間違いじゃないのか？と葛藤を繰り返し、最期までM様らしさを考えながら支援を行ったので報告する。

(具体的な取り組み)
M様が入居されてから今日まで、私たちスタッフと築きあげた信頼関係からM様が何を望んでいるのかを考え、M様ならこう言うはずだ！こうしたいと思っている！！と考えられることをスタッフ全員で話し合うことにした。特に「M様とは？」となった時、「食べること」「歩くこと」はM様が最期まであきらめたくないことだと感じた。

<支援策>

- ① M様がどう思っているのか？
- ② 家族・スタッフの思い・願いとは？
- ③ ①②をどのように医療と連携するのか？
- ④ 医療から限界を告げられた時、それをそのまま受け入れるのか？
- ⑤ 代替案を考える。

「食べること」
M様の食べたいという思いは強く、普通食から刻み食やミキサー食に変更し食事介助していたが、次第に食べることが難しくなった。誤嚥性肺炎のリスクが高くなってしまったため、絶食状態となってしまった。しかし、それで終わることなくスタッフ間で話し合い、担当医の了承を得て口腔清拭をジュースなどで行うとM様にも笑顔が多く見られるようになった。また香りつきのリップを使用することにより、少しでも食べている気持ちになっていただけのように工夫した。

「歩くこと」
M様は調子を崩す以前からよく歩かれていた。身体が傾き始め、歩行が困難になってからもM様の足が1歩でも前に出る時は、スタッフが両脇を抱えてでも歩いていただいた。それでも医療の判断により「今のM様を歩かせるのは無理だ。」と言われてしまった。そこで、家族・スタッフ・協力病院の作業療法士と話し合い、リクライニングの車椅子をレンタルしていただき利用した。座っていただくとM様の表情も良く、「みんなの中に居ること」を実感されているようであった。リクライニングの車椅子を使用した事で目標もでき、散髪や髪染めもし、亡くなる直前にはみんなでお花見に行く事もできた。そして最期までみんなの輪の中で過ごすことができた。

(活動成果と評価)
M様の状態が急激に変化していく中で、M様・家族・スタッフは共に迷い、悩みながらの支援だった。家族もスタッフも毎日が不安との戦いで時にはM様に会うのが恐かったり、それでもそばに居たくて持って行き場のない思いを隠しながら過ごしていた。そんな中でも「あーでもない、こーでもない」と意見を出し合い、医療的なことを理解し受け止めながらもマニュアルにはない「M様らしく最期まで！」をみんなで考え、支援できたように思う。

(まとめ)
今回、M様との関わりの中で「絶対にあきらめない！」という強い気持ちを持つことができた。医療的には限界だと言われたこと全てを受け止めるだけでなく、「じゃあこうしよう。」「それがダメならこうしよう。」とこれでもかとはばかりにあがくことも大切ではないのかということに改めて気付かせていただいた。これからもその人らしく最期を迎えるためには家族・医療・スタッフの連携はもちろんのこと、決して最期まであきらめないという強い気持ちを持って支援していきたい。